

と く
徳

ほ う
朋

煩惱に振り回されずに生きる

いちらく まこと
一楽 真



いちらく まこと
1957ー現在
石川県生まれ。大谷大学
教授、真宗大谷派宗円寺
住職

むさぼ 貪りの心に振り回されたり、いかに 瞋りの心で人を傷つけていく。これはやはり痛ましいのです。痛ましいからといって、では今日からやめなさいと言われてもやめられない。そのとき、親鸞聖人に何が見えたかという、これは法然上人ほうねんしょうにんから教えられた道ですが、煩惱を断ち切ることが出来なくても、煩惱に振り回されずに生きることは成り立つのです。

それはなぜかという、浄土を通して「このようないのちを生きなさい」と教えられ続ける道があったのです。私の根性こんじょうは変わらない。私が立派になるではない。しかしその教えによって、どういふいのちを生きるかを一步一步教えていただくのです。

繰り返しますが、煩惱がなくなるのではない。煩惱は生きている限りあるのです。しかしそれでも、煩惱に振り回されずに一步一步歩いていく事は出来る。「不断煩惱得涅槃ふだんぼんのうとくねはん」という言葉が『正信偈しょうしんげ』にあります、これは念仏によって私たちに開かれる世界です。

煩惱はなくならなくても、煩惱に振り回されないような生き方がある。もっと言えば、煩惱があることが、またいろいろなことを尋ねていく大切な材料になるのです。煩惱がなくなってしまうのなら、念仏いも要りません。煩惱があるからこそ、その中をどう生きていくか、一步一步確かめていけるのです。

親鸞聖人は自分がどのようなものであるかをはっきり教えられたのです。煩惱を断ち切ることができないということがはっきりした。こういう自分だということを教えられたのです。このことがはっきりわかりましたということが、親鸞聖人の信心の中身です。煩惱を断てないからこそ、教えに導かれ続けたいといけない自分ということがはっきりしたのです。

『歎異抄』のお言葉を借りれば、たとえ法然上人にだまされたとしても、後悔しませんという言い方が出てきますが、実際そうなのです。たとえ法然上人が、「このあいだまで私が言っていた事は間違いだった。私は今日から考え方を変えました」と言われたとしても、親鸞聖人は何も困らないと思います。「ああ、そうですか」と言われるに違いありません。そして「自分の姿をはっきりと教えられました。だから念仏の教えを聞き続けていきます」と言われるのではないかと思います。



(『この世を生きる念仏の教え』)

浄土真宗の教えとは「煩惱に振り回されずに歩いていく」ことだと思います。煩惱を離れられない人間だからこそ、何が本当の事なのかを教えられる道がお念仏の道だと思います。(哲弘 拝)

この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

